

ますます複雑化することや、子弟の進学問題等々のために、これが大変に難しくなっているのも事実であります。

6. 海外技術援助

国鉄の、新幹線を建設し 210 km/h 運転を行っていることを頂点とする総合技術力は、海外ではきわめて高く評価され、私の滞米 4 年間にも、「日本は、昔フジヤマ、ゲイシャ、今、新幹線」という言葉をたびたび聞かされました。しかも、相手は私が国鉄出身の外務省領事であることを露しらずしてこの言を吐くのですから、これはまともに受け止めてもよいのではないかと思います。

ことに、発展途上国は、鉄道を建設することによって国の開発を行わんとする気風が強く、東南アジア、中南米方面からの引合いに対し、現在、相当数の国鉄技術団が現地に駐在して指導を行っています。また、アフリカのザイル共和国（旧ベルギー領コンゴ）においても、日本の円借款と日本の技術によって、約 150 km の鉄道建設を行わんとしており、十数名の国鉄技師が乗り込んでいます。また、最大の海外援助プロジェクトとしては、日本がその石油輸入量の 80% をもあおいでいる「イラン」から、皇帝陛下パーレビ国王の至上命令により、テヘラン—マシャッド間 1000 km を 4 時間で結ぶ高速鉄道を、ぜひ日本の手によって建設してほしい、という申し入れが舞い込み、日本も石油を確保する国策としてもぜひともこれに協力しなければならないとして、国鉄で約 20 名の部隊を編成し、目下現地調査中であります。なにせ、これが実現すると、2~3 兆円にも及ぶ大プロジェクトになるので、そのときにはさらに相当数の技術陣を送り込まねばなりません。その暁には、夏に休暇をとって、1~2 か月間家族ともども、スイスのユングフラウを眺めて過ごす国鉄マンが今後急激に増えることとなるでしょう。

7. 財政問題

すでに紙面を使い果たしたようですが、国鉄財政問題については、日本の「総合交通体系」の中から、国鉄の占める役割を位置づけて、それに必要な投資は、国民経済のために行わなければならない、この財源としては、運賃収入、国からの援助、そして国鉄の最大限の企業努力、といったものが三本の柱となりましょう。

その際、投資の中心的役割を果たすのが、国鉄土木陣営であります。「企業は人なり」といいますが、次代を担う若き優秀な技術者が、どどしども国鉄に集まって、思いきり腕をふるわれることを願って、筆をおきます。

④ 教 職	
花 房 保*	

1. 教職ということ

「先生といわれるほどの馬鹿でなし」という言葉がある。この言葉の解釈はいろいろあるようで、必ずしも学校の先生のことを指しているのではない、という説もある。しかし、総じて学校教師というものは、学校の中では生徒に対してあるときは、謹厳実直で学識があるようにみえるが、実際は世間知らずで収入も低く、実用にはさっぱり役立たない。ポーズと実体との乖離からくるこっけいさを風刺した言葉であろう。教師は聖職者か労働者かという議論が戦後から今日まであくことなく繰り返されてきた。今日では教育問題全般が大きな社会問題になっているので、必然的に教師の問題も世間の議論を呼ぶことになる。しかし、教師が聖職者か労働者かという論議ほど馬鹿げたものはない。いずれか一方に位置づけてしまおうとすること自体ナンセンスである。教師といえども、まぎれもなく「この世間を生きていかねばならない」限りにおいて、雇用された労働者である。しかし、同時に教師はその多くが公務員として公共的なサービスを義務づけられている。この点において他の公務員と同様に＜聖職的＞使命感を職業倫理として持たなければならない。いわんや＜人間の魂＞とふれ合わねばならない身であるからには、たえず自己を神に近づける努力が必要であろう。

最近では＜教師は専門職である＞という概念規定がなされている。これは 1966 年の ILO とユネスコによって行われた「教員の地位に関する勧告」で決定的な方向づけが与えられた。しかし、小中高校の教員を考えた場合いわゆる専門職というに値するかどうか、多分に疑問を感じないわけにはいかない。まず第一に、専門の科学・技術においても優れたものでなければならないであろう。例えば、土木の教員であるからには、社会一般の土木技術者として堂々と適用する実力がなければならない。い

* 正会員 兵庫県立竜野実業高等学校校長
土木学会高校土木教育研究委員会委員長、西日本高校土木教育研究会会長



研究会で研修する高校教諭各位

や、むしろ世間の水準を抜いていなければならないであろう。こういう点に関して高校教師の現状は決して満足すべきものではない。第二にそうすれば教師の専門性というものは、教えるという技術において<余人をもって代えがたい>権威があるのかということになる。たしかに教科教育学とか、教授法についての研究は積み重ねられている。しかし、これとても学校の外にいて広い意味の教育に携わっている人とあまり変わらない場合が往々にしてありうる。アマとプロの差は無いかもしれない。

以上のようにみえてくると、教師というものの社会的な位置づけがいかに難しいかがわかる。特別な職業であるようで、実際の中味はだれにもできる一般的なことである労働者でもあり聖職者でもあり、多少頼りないところはあるが専門職であるのが教師というものであろう。個々の専門分野で優れた人は世間に多い。また、教師よりも正確にうまく子供に教える技術をもった人もおられるかもしれない。しかし、「なんのために人間は国語や英語や数学や技術を学ぶのか、それが人間の生き方にどう係わるのか。一人の人間は多くの他人とどう結びついているのか」ということを納得させうる専門家は教師である。分化し解体しかかっている文化を総合し、人間像と世界像を結びつける教養人として教師は再生すべきであると私は考える。

2. 教員となるには

国公立を問わず高等学校の教諭になるためには、高等学校教諭（一級または二級）普通免許状を取得しなければならない。免許教科としては土木というのはなくて「工業」である。基礎資格は一級が修士または専攻科、二級が学士ということになっている。大学を卒業すればよいというわけではなく、一般教育科目（人文・自然・社会）、教科に関する専門科目、教職に関する専門科目（教育原理、教育心理、教科教育法、教育実習）について免許法に定められた所定の単位を修得したものに与えられ

る。教諭としては二級免許状で十分であるが、経験年数の経過によって一級を取得できる。一級は校長になる資格として必要である。

実際に教員として採用されるためには、任用機関の行う採用試験に合格しなければならない。このような面倒な手順を経て教員になるのだから、工業関係の大学卒業者に教員志願者が少ないのもわかる。しかし、最近は不況のせいか教員免許取得希望者が増加しているようであり、教員採用試験の志願者も年々増加している。

3. 高校教員の給与

教員の給料は安いというのが定評である。給料が低いから優秀な人材が集まらないということもないだろうが第一条件は給料だというわけで登場してきたのが「人材確保法」といわれるもので、昭和49年2月25日から公布・施行されることになった。これに基づいて人事院勧告が三次にわたって行われた結果、昭和51年3月現在で文部省のまとめたところによると次のようになり、かなりの改善になっている。

① 初任給：91 900円で行政（上級乙）より18.9%、行政（上級甲）より14.2%高い。

② 教諭の給与水準：51才まで府県の部長級をやや上回り、それ以後は部長級をやや下回る（国の行政二等級水準）。

③ 教頭の給与水準：府県部長を4~9%程度上回る（国の行政二等級を上回る）。

④ 校長の給与水準：府県部長級を6.8~12.2%程度上回り、府県の大部長を4%程度下回る（国の行政二等級と一等級の間）。

上記の給与は本俸だけでなく教員特別手当（本俸の6%程度）が含まれていると思われる。工業科の教員はこの特別手当は他の教員の1/2であるが、そのかわり産業教員手当10%が支給される。

給与以外の労働条件もまた雇傭される人間としては関心の深いところである。よく「先生は休みが多くてよいなあ」といわれる。たしかに夏休みが約40日、冬休みが約14日、春休みが約15日ある。しかし、これは休業日といわれ、生徒は休みであるが、教師は勤務上の休日ではない。慣例上家庭研修が認められるので普通の教員にとっては相当フリーな期間であるといえよう。このほかに、法規に基づく年次有給休暇・特別休暇その他があることはいうまでもない。このようにみえてくると給与といい労働条件といい、高校教員という職業は決して敬遠されるべき職業ではない。当事者にはいろいろと悩みや不満もあるけれども、それはどこの職場にもあるものにすぎない。むしろ、「ぬるま湯の中の高校教師」

土木系学科の数、生徒数、専門教員数、実習助手数調査

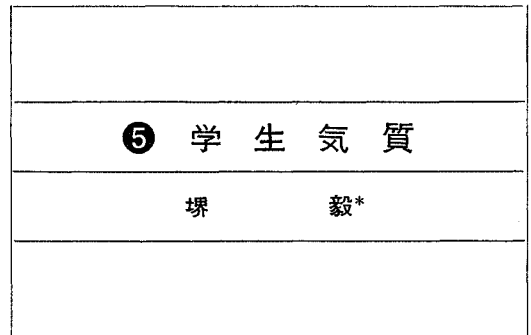
区分	項目 学科名	国 公 立										私 立									
		全 日 制					定 時 制					全 日 制				定 時 制					
		学科数	生徒数		教専員数門	助実手数習	学科数	生徒数		教専員数門	助実手数習	学科数	生徒数		教専員数門	助実手数習	学科数	生徒数		教専員数門	助実手数習
			男	女				男	女				男	女				男	女		
土 木	土木建設	155	21531	87	771	224	13	1007	41	13	18	3154	1	70	12						
	建設機械	3	542	3	19	4	3	273	4	12	3	822	5	15	4						
	建設機械	1	219		8	3															
	開発機械	1	237		8	2															
	土木建築						1	97	4	1	1	397		6	5						
	水中土木	1	125		5	4															
	建設工業	1	244	2	7	2					1	288		4	2						
工業土木										1	721		11								
計	162	22898	92	818	239	17	1377	4	57	17	25	5382	6	106	23						

といわれなければならないと思う。

4. 土木科教員の概況

昭和 50 年度末現在、全国で土木科が設置されている数・その在籍生徒数・教員数は上表のとおりである。工業高校の約 1/3 に土木科がおかれており、生徒の数は全工業高校の約 6% 強、専門教諭の数は工業教諭数の 6% 弱である。ざっと 1000 人近くの人が全国の高校で土木専門の教員にあたっているのである。これらの年齢や学歴構成はどうなっているか。適当な統計がないので正確にはいえない。40 代後半より上の方は旧制専門学校卒が圧倒的に多く、旧制大学卒はきわめて少ない。40 代前半以下の方はほとんど新制大学卒であることは論をまたない。50 代の方で学校卒業後すぐに先生になった人は少ないと思う。たいていは終戦直後の混乱期にいろいろの事情で教師に＜デモ＞なろうと思った人が多い。戦後今日までの工業教育はこのような人たちによって推進されてきたといって過言ではない。このことは、工業教育にとって幸いだったと私は思う。昭和 30 年代の高度成長時代に工業高校が増設され、教員の不足が考えられたため、国立大学に教員養成所が設けられた。第 1 回生は昭和 39 年に卒業し現在 33 才くらいである。5 回生まで送り出して廃止になったが、工業教員の若手の中でこの人たちの占める割合がきわめて大きいことに注目すべきである。10~20 年後の工業教育を考えると、この養成所卒の人たちの責任は重いと思う。土木の場合、国公立大学工学部の卒業生で教員になる人がきわめて少ないのも問題点の一つである。認識を新たにしたい。教員を志望してほしい。

このほか、高校教育の現状と教員の意識の問題、研究組織と活動状況など、高校土木科教員にまつわる多くの問題を取り上げたかったが、与えられた紙面もつきたので、このあたりで終わることにしたい。



⑤ 学生気質

塚 毅*

1. 今も変わらぬ青春群像

土木に対する一般の印象は、「自然を相手に闘い、巨大な構造物をつくることに魅力がある」という答は入学試験などの口答試問の際によく聞かれることである。

しかしながら世間一般の風評はどうであろうか。酒や人情にもろいようなイメージだけが強く出されていて、映画などに出てきたのはわずかに「虹にかける橋」「黒部の太陽」など二、三が思い浮かぶ程度で若戸大橋、高速道路なども建築分野の仕事と考えられているくらいの認識であり、一般社会には土木という仕事あまり理解されていないことだけは確かである。

これらを大学と学生についてみると、大学が直面するさまざまな問題の背景には、大学の大量化の影響によるものが大きいと思われる。これに伴って、学生はいかに変わってきたか、高等教育システムの規模の拡大の構造を、① 数量的側面——学生人口、財政、施設、設備の拡大と、② 質的側面——多様化・多元化の現象、高等教育の種別化、学生層の意識変化、管理上の民主化と効率化など、とに見ることができる。そして、④ マンモス化・マスプロ化した教育における学生の不安には、単に少数グループをつくったり、建物や教室の拡充では対

* 正会員 工博 日本大学教授 生産工学部土木工学科